広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第61号　2012　153－161

宮澤賢治「オツベルと象」の教材性の検討

― 言葉の二重性という観点から ―

中　野　登志美

（2012年10月２日受理）

Exploring the Quality of Kenji Miyazawa's Work "Otzbel and White Elephant" as Material for Literature Instruction
― With focus on the double meanings in "Otzbel and White Elephant" ―

Toshimi Nakano

Abstract: Kenji Miyazawa's work "Otzbel and White Elephant" has never been examined about illustrations on picture books. Illustrations on "Otzbel and White Elephant" represent artists to various constructions. Therefore it takes in teaching.

The aim of this paper is to useful Illustrations on "Otzbel and White Elephant"

Added to this, Kenji Miyazawa's works represent execution as binary phases. These, for example, Otzbel's sense of value, lonesome smile on White Elephant countenance, narrator by a cattleman and a last line in this work are making various constructions. These things make possibility clear that various constructions give not only binary readings but also various readings. Various readings grow learner'critical ability. Judging from the above, there is no doubt about good worth in "Otzbel and White Elephant".

Key words: Japanese literary education : the double meanings of word
: useful Illustrations on picture books : learner'critical ability
キーワード：文学教育・言葉の二重性・絵本の挿絵の活用・学習者の批評する力

１．はじめに

宮澤賢治の「オツベルと象」[1] は大正15年１月１日発行の『月曜』（尾形亀之助編）の創刊号に発表された作品である。宮澤賢治の作品は戦後から現在に至るまで小学校・中学校・高等学校の教科書教材として取り上げられている。宮澤賢治の諸作品において「オツベルと象」は最も長い間，教材として採用されている[2]。「オツベルと象」は昭和28年に教育出版の『中学国語（総合）一の上』や東陽書籍の『ことばの生活（文学の本）二年』の教材として採用されて以来，平成24年度版の『伝え合う言葉 中学国語』（教育出版）の一年生の教材として現在でも採用されている。戦後以来長期間にわたって教材化されている点や，再び教材として選定された[3] 点から見ても「オツベルと象」は国語教科書の教材として一定の評価を得た作品であるといえよう。

その一方で，古神子民夫[4] や松田司郎[5] をはじめとする多くの論者が指摘するように「オツベルと象」における「白象はさびしくわらつてそう云つた」の解釈は作品の主題に結び付く表現であり，指導する際に大切になる部分となるものの，多くの学習者たちがどのように読むのか疑問を抱く箇所である。また，「オツベルと象」の授業の実践記録で「最後の一行は，意味がわからない」と書いた中学一年生の男子生徒の感想文が報告されている[6]。この男子生徒が書いた「最後の一行」とは「オツベルと象」の結語にあたる「おや，［一字不明］，川へはいつちやいけないつたら。」の箇

所である。この結語は『賢治研究』第10号に「この一行はあまり意味がない」と記載されていた意見に対して，山下宏は反論し，「この作品には，解釈上の問題点がいくつかあるだろう。が，このたった一句を全体構成の中でどう位置づけ，その意味をどう汲み取るかというのが，実は，その中でも一番大きな問題点ではないだろうか。」[7] と言及し，結語をどのように解釈し位置付けるかということを重要視している。最近の研究[8] でも白象のさびしい笑いや，結語の一行の意味をどのように捉えるのかを考察しているように，未だにこの二点の読みが定着していない。

この論点は例えば，なぜ白い象なのか，牛飼いは誰に語っているのかといった，この作品の解釈上の重要な問題とも関わってくる。そこで本稿では白象の寂しい笑いと結語の一行の解釈の二点に焦点化して，言葉の二重性という観点から「オツベルと象」の教材的価値を検討していく。白象のさびしい笑いは作品の主題に結び付く重要な箇所である。この二点を焦点化して検討することで，白い象の意味や，語り手の「牛飼ひ」の問題についても連関して問い直すことになるだろう。さらに結語の一行に即して言うと，結語の一行の部分を表現した挿絵はどの教科書教材にもなかった。しかし，「オツベルと象」の絵本では結語の一行を表現した挿絵が幾つか描出されている。結語の一行の解釈を授業者が扱う中で，管見に拠れば，絵本の挿絵を使って結語の一行の読みを深めた先行研究はひとつも見当たらない。そこで本稿では絵本の挿絵を検討しながら，「オツベルと象」の解釈を提示していきたい。

2．「オツベルと象」の作品構造

「オツベルと象」には「……ある牛飼ひがものがたる」というサブタイトルが提示されている。このサブタイトルによって，「牛飼ひ」がオツベルと白象の物語を語っているという作品構造が採られていることを明示している。その上「……ある牛飼ひがものがたる」とサブタイトルが示されているだけではなく，「牛飼ひ」が物語る物語内容の前には「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」の表示があり，「牛飼ひ」の語り出している日時が示されている点にもこの作品の特徴が見出せる。これらの特徴を考慮すると，「オツベルと象」という作品は語り手の「牛飼ひ」がオツベルと白象の物語をメタプロットとして語っている作品構造であるといえよう。サブタイトルの「……ある牛飼ひがものがたる」と結語の一行の「おや，［一字不明］，川へはいつちやいけないつたら。」は構造的に照応しているのである。結語を意味がないものと捉えた場合，この作品の構造が理解できなくなるのである。

作品構造については「架空の語り手「牛飼ひ」を設定し，作者はその向こう側にいる」といった「語り手の二重構造」であるという平澤信一の指摘がある[9]。平澤はこの作品は作者と語り手の層から成る作品構造であるという立場から「二重構造」であると捉えている。しかし，本稿では「牛飼ひ」が語っている語りの層を一括りにするのではなく，「牛飼ひ」の語りには，「牛飼ひ」が語る切っ掛けとなったメタプロットの「オツベルと白象」の物語の層と，「牛飼ひ」がその成り行きを聴衆の前で語っている「牛飼ひ」の語りの層という二重の層から成っているという見解である。換言すると，この作品は，語り手である「牛飼ひ」の語りの層の中にメタプロットとしてのオツベルと白象の物語が包摂されている入れ子型の二重構造である。さらに，この「……ある牛飼ひがものがたる」というサブタイトルは，サブタイトルという本質から見るならば，「牛飼ひ」の語りではなく，「牛飼ひ」の語りの枠組みでは収まりきれない構造になっている。この作品はサブタイトルの提示や「牛飼ひ」が語り出す前に必ず日時を「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」として表示している点は「牛飼ひ」の語りの層の枠組みを超越している。したがって，「オツベルと象」はサブタイトルや「牛飼ひ」が語る日時を作品世界内に提示した作者の存在を無視できない構造になっている。その二重の語りの層の一番上の層にサブタイトルや「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」といった日時を表示した作者の層がある。その上でサブタイトルと照応関係にある結語の一行の作品構造に着目したのが山元隆春である。山元は「「おや，［一字不明］，川にはひつちやいけないつたら」という末尾の一文に代表されるような，直接の語りかけは，このテクストにはじめから読者の占めるべき位置が内包されているということを証してくれる」[10] と指摘している。サブタイトルと，そしてその照応関係にある結語の一行の構造は「オツベルと象」の独特の特徴といえる。つまり，この作品は「オツベルと白象の物語」－「「牛飼ひ」の語り」－「作者」－「読者」といった四重の層から成る入れ子型の作品構造になっている。

3．言葉の二重性をめぐって

3-1　オツベルの価値観

メタプロットの「オツベルと白象の物語」は，白象がオツベルのところにやって来たことが発端となっている。白象がやってきたのは新式の稲扱器械を六台も設備したオツベルの工場であった。工場はオツベルが

所有しており，十六人もの百姓達を労働者として雇っている。オツベルと十六人の百姓達との関係性については門倉昭治[11] や池上雄三[12] の「地主対小作人」とする見解と，西田良子[13] や宇佐美眞[14] の「近代的資本主義における資本家と労働者」とする見解の二通りが挙げられる。宇佐美は「明治期には，高い地租の金納化などの政策によって自作や小作農民達は生活窮乏に陥り，土地を失い，農村は荒廃して行ったと言われている。オツベルはそれら貧しい農民を低い賃金によって雇い，さらに仕事を機械化することでコストを抑え，順調に収益を上げている今をときめく豪農資本家という設定になっているのではないだろうか」[15] と指摘している。オツベルが経営する工場は機械化されており，機械化された工場内を「往つたり来たり」して監督するオツベルの姿に象徴されるように工場内は組織化されている。

無産階級である「牛飼ひ」から見れば，オツベルは有産階級の人物であり，近代資本主義の成功者であった。そのオツベルのもとに，ただの象ではない珍しい白象がやって来たのである。人の何倍も働いて貴重な労働力になる白象の価値を一瞬で見極めたからこそ，オツベルは「命懸け」で「どうだい，此処は面白いかい。」「ずうつとこつちに居たらどうだい。」と誘いこむのである。資本家であるオツベルは白象を自分の所有物として手に入れて，安い賃金で働かせたかったのであった。万が一，「牛飼ひ」が語っているように，白象を「サーカス団に売り飛ばす」という選択肢を選んだとしても「万円以上もうける」ことが出来るのである。大正15年時の「万円」は，竹腰幸夫によれば現在の金額に換算すると5000万円相当に値する金額であった[16]。つまり，オツベルの「ずうつとこつちに居たらどうだい。」の言葉の裏には白象を金儲けに利用しようとする思惑が潜んでいる。白象を見て「顫え出す」ほどの小心者でありながら，オツベルが恐怖心に打ち勝って白象を誘いこむのは，それだけオツベルが儲けること，いわば金に価値を置いているためであった。「ぼくは時計は要らないよ。」「ぼくは靴などははかないよ。」と答える白象に「まあ，持つて見ろ。いゝもんだ。」や「まあ，はいてみろ。いいもんだ。」と言葉巧みにオツベルは「百キロもある鎖」の付いた「ブリキでこさえた大きな時計」を与えて「四百キロある分銅」を白象の靴の上にはめ込む。「なかなかいいね。」と白象は喜ぶのであるが，オツベルの真の目的は白象に大きな時計と靴を与えることではなく，百キロの鎖と四百キロの分銅を白象に取り付けることであったのは言うまでもない。オツベルの言葉には裏があることが示された好例であろう。「何かを伝え，何かを隠すという「ことば」の力を「オツベル」が使いこなせることである」[17] という須貝千里の指摘にあるように，自己の思惑を隠蔽した言葉を巧みに操ることで，白象が逃げ出さないようオツベルは画策している。そうすることで金儲けができることをオツベルは熟知しているのであった。オツベルの言葉は自己の価値観を最優先するための手段として使われている。このようなオツベル像に関する実践授業を通して牛山恵は次のような言及をしている。

> 物質的に豊かな生活を希望し，金銭的に恵まれることを評価する彼らは，オツベルを頭から否定しようとはしない。彼らにとって，オツベルは現実的な意味で理想の実現者である。そして，彼に力を認めるのである。その力も悪知恵を働かせるというだけに限定してはいない。むしろ，その地位を獲得したことを評価しているのだ。オツベルがどのようにして現在の地位を築きえたのかということは作品の中ではまったく語られていない。だが，生徒たちは，そこにオツベルの苦労と努力を想定していく。（中略＝筆者）彼らがオツベルを肯定的に見るのは，彼の姿に自分自身の現実的な夢の投影を見るからではないだろうか。[18]

学習者たちがオツベルを肯定的に見て評価するのは「牛飼ひ」の「オツベルときたら大したもんだ」の言葉を額面通りに読んで「何らのシニカルなひびきを感じない」[19] ことに起因する。学習者たちは「牛飼ひ」の皮肉が交じった言葉の二重性を読み取っていないのである。オツベルの言葉の二重性については後で検討する。牛山は「オツベルと象」の教材的価値を「結局，オツベルが殺され，白象がさびしい笑いをすることでしか解決しない現実の矛盾につきあたりとまどう」が，「それはやがて人間の本質的な生への問題意識を生じせしめるもの」になる[20] としている。確かに，この作品は金儲けといった利益を優先したオツベルの死という結末を通して，人間の本質的な生の在り様について思案することを働き掛ける教材であるといえるだろう。だが，本稿では，オツベルの死という結末を引き起こした言葉の二重性の問題を通して，学習者の批評する力を育成することを目指している。そこで次節では，オツベルの死に相関している白象のさびしい笑いについての考察を進めていく。

3-2　白象のさびしい笑い

多くの論者が指摘しているように，白象のさびしい笑いは作品の主題と結び付く箇所であり，この作品を指導する際に避けられない大切な場面である。逃亡しないように白象の身動きを束縛しようと画策するオツ

ベルに対して「なかなかいいね」と素直に喜ぶ白象は池上雄三の「純粋無垢な心」[21] の持ち主，池川敬司の「無邪気」[22] という指摘があるように他者を疑うことを知らない世間知らずの善良で純真な存在として形象されている。牛山恵が「ただ働くこと自体に喜びを感じている」[23] と指摘しているような無欲な労働者でもあった。これらの点を踏まえると白象とオツベルは対照的な存在として描出されていることが窺知されよう。オツベルの言葉には二重性があり，利益を得る手段として本音を隠して巧みに使い分けている一方で，「税金が五倍になった。今日は少うし鍛冶場へ行つて，炭火を吹いてくれないか」というオツベルの言葉を額面通りに受け取って懸命に働く白象は，言葉には二重性があることを認識していない純粋無垢な心の持ち主として形象されている。

ここで注目したいのは象が「白」い象であるという理由である。「オツベルと象」の先行研究において，象の住む世界は釈迦が入滅した場所の四方に植えられた沙羅樹の下にあることを考慮して，白象は普賢菩薩の乗る象を連想させるといった遠野拓[24] や遠藤祐[25] の見解や，宮澤賢治が日蓮宗の熱心な信者であったことに関連付けて普賢菩薩の乗り物であった白象との関係性を指摘した古神子民夫[26] の見解がある。これらは普賢菩薩の乗り物であった白象と結び付けた解釈である。本稿ではこの作品は中学一年生の教材であることを考慮して，平澤信一の「生まれつき」に「他の象と違っている」だけで「白象を必要以上に宗教的に読む必要はない」[27] という見解を首肯したい。つまり，白象の白さは無邪気で純粋無垢な象であることを象徴している。だからこそ，オツベルの「ずうつとこつちに居たらどうだい。」という本心を隠した誘い掛けに「居てもいいよ」と承諾し，オツベルの度重なる催促を快く引き受け，懸命に働くのである。「ああ，つかれたな，うれしいな，サンタマリア」という白象の台詞は白象が働くことに喜びを感じていることを表している。白象は労働することの喜びで心が満たされていた。だが，オツベルの仕打ちが酷くなり，白象はオツベルの酷使を訴えた「ぼくはずいぶん眼にあつてゐる。みんなで出て来て助けてくれ。」という手紙を仲間の象に書くのである。白象の手紙を見た議長の象の「オツベルをやつつけやう」という呼び掛けに，仲間の象たちが一斉に蜂起する。仲間の象たちを憤慨させたのは「ぼくはずいぶん眼にあつてゐる。みんなで出て来て助けてくれ。」という白象の手紙であったが，平澤信一の「白象を助けるという目的が，オツベルをやっつけるに変わっているのに，誰も疑問に思わない」[28] という指摘は傾聴に値するだろう。この白象の手紙によってオツベルの死という悲劇的な結末になるのである。このような悲劇が起こったのは「みんなで出て来て助けてくれ。」（傍点・筆者）と書いたのに「やつつけやう」になったのは，白象の手紙の言葉が仲間の象たちに正確には伝わらなかったことが要因となっている。須貝千里が言及しているように「「白象」にとっては，結果として〈「ことば」は伝わらない〉問題が「仲間」の象との間に現れ出てきてしまった」[29] のである。追いつめられた白象は仲間に援軍を頼まざるを得なくなって手紙を書いたのだが，仲間の象たちが「オツベルをやつつけ」るとは考えもしなかった。ここに本来の言葉の意味の乖離といった言葉の二重性の問題が浮上している。厳密に言うと，オツベルは殺されたのではなく，五匹の象の重さで崩壊した塀の落下による圧死であった。オツベルを圧死させたのは言葉を額面通りにしか受け取れない白象の無知さが誘因となっている。「ああ，ありがたう。ほんとにぼくは助かつたよ。」とさびしく笑う白象について，池上雄三の「純粋無垢な心をオツベルによって踏みにじら」れ，その上「オツベルが死んで自分が助かっ」ったという二重の傷心[30] による寂しい笑いという見解や井上寿彦[31] の「自嘲」という見解が挙げられる。自分の書いた手紙によって白象は助け出されたけれども，その結果，オツベルを死なせてしまったこと，そしてオツベルの死を招いたのは言葉を鵜呑みにした自分の無知さであることを白象は知るのである。言葉が本来の意味と乖離する場合があり，そのことによって悲劇を招いてしまった事態を痛感したゆえに，白象はさびしい笑いをしているのである。

3-3「牛飼ひ」の語りに見られる心の揺れ動き

「牛飼ひ」が「オツベルと白象」の物語を語るのは「第一日曜」「第二日曜」「第五日曜」である。「牛飼ひ」が語り出す動機となった「オツベルと白象」の物語，具体的に言うと，白象がオツベルのところにやって来て，オツベルが象の集団に圧殺されるまでの物語の期間はわずか十二日間である[32]。オツベルの繁栄と破滅に至る十二日間の出来事を三回に分けて「牛飼ひ」は語っているが，「牛飼ひ」の語り口調が変化していった点に注目したい。

「第一日曜」に初めて「牛飼ひ」が「オツベルときたら大したもんだ」と前置きをしてから語り始めたのは，「牛飼ひ」が近代資本主義者のオツベルが白象をどのように対処するのか興味津々であったためである。突然やって来た白象を自分の思い通りにした機知に富むオツベルの才覚を評して「大したもんだ」と語ったのであった。「第一日曜」の冒頭部分の「大したも

んだ」は言葉巧みに白象を手に入れたオツベルの機転の良さを表現している。欲しいものを手に入れたオツベルの才覚を評した「牛飼ひ」の心情が表出している。今後の展開に興味を募らせながら，オツベルと白象のこれからの事態の成り行きを「牛飼ひ」は語っている。しかし，「牛飼ひ」が「第二日曜」で語っているオツベルと白象の成り行きに関する内容から，「牛飼ひ」のオツベルに対する心情の変化が垣間見えるのである。「二十馬力」もある白象は懸命に働いているのに，オツベルは白象が逃亡しないように百キロの鎖と四百キロの分銅を取り付けただけではなく，労働の対価である藁を水曜日には八把，木曜日には七把と減らされる実態が明らかにされていく。オツベルは安い賃金で白象を自分の意のままに操っているのであった。そして，とうとう「昨日はたゞの五把」になってしまったのである。「牛飼ひ」のいう「昨日」とは土曜日にあたる。土曜日は「牛飼ひ」が聴衆に語る「第二日曜」の前日である。以前から日に日に藁が減らされていき，とうとう前日の土曜日には「たゞ五把」の藁になってしまった事態を「じつさい象はけいざいだよ。」と，いわば皮肉を交えて語っているのである。オツベルの仕打ちに対して「すこしひどくし過ぎ」ているという「牛飼ひ」のオツベルに対する反感の思いが，「第二日曜」と「第五日曜」の「牛飼ひ」の語りから窺える。「第一日曜」は白象を思いのままに操るオツベルの才覚に対する評価や，そのようなオツベルを賞賛する思いが込められていた。だが，「第二日曜」の前日の土曜日に，白象への酷過ぎる仕打ちに「牛飼ひ」はオツベルに反感を抱いたのである。当然，聴衆に語る次の日の「第二日曜」以降は，皮肉が含まれた反語的な「大したもんさ」としてオツベルを語っている。「大したもんだ」や「大したもんさ」と語る「牛飼ひ」の心境には，労働の対価である藁が毎日減らされていく中で，白象は懸命に働いているのに，そのような白象を酷使するというオツベルに対して賛辞の思いはない。豹変したオツベル像に「牛飼ひ」の心情は揺れ動き，変化していったのである。「牛飼ひ」の「大したもん」という語りにはオツベルの賛辞から，オツベルに対する反感が込められた皮肉の言葉へと変化した言葉の二重性が読み取れる。

3-4　結語の一行をめぐる解釈

「第五日曜」の「牛飼ひ」の語りの結語である「おや，［一字不明］，川へはいつちやいけないつたら。」の一行にも言葉の二重性がある。この一行は初出の雑誌『月曜』では「おや，■，川へはいっちゃいけないったら。」となっていた[33]。というのは，■の部分にどのような文字（ことば）が入るのか，草稿がないために確定することができなかったからであった。しかし，普及版となった文圃堂版では，■の部分に「君」を入れて，「おや，君，川へはいっちゃいけないったら。」となっている。この文圃堂版を底本にしたことによって，その後に発行された羽田書店版（昭和14年）も十字屋版（昭和14年）も■の部分に「君」の字を入れている[34]。これは雑誌発表時にあった■の箇所を，校訂者が勝手に「君」の字を入れていたことに拠っている[35]。校本ではない『宮澤賢治全集』（『宮澤賢治全集』第十巻（筑摩書房，昭和31年発行）では「おや，君，川へはいっちゃいけないったら。」と「君」の字があてられていることが確認できる。校本である『校本 宮澤賢治全集』（第11巻，筑摩書房，昭和49年発行）で「おや，〔一字不明〕，川へはいつちやいけないつたら。」と改められた。このような経緯を反映して昭和27年度検定の教育出版『総合中学国語 一の上』や昭和40年度検定の筑摩書房『国語１中学校用』は「おや，きみ，川へはいっちゃいけないったら。」と■の箇所を「きみ」に改変している。その後の昭和30年度検定の『総合中学国語 改訂版 一の上』（教育出版）や昭和32年度検定の『国語一 中学校用』（教育出版）ではこの結語の一行はすべて削除されている。面白いのは，この結語の一行は通常「川へは行っちゃいけないったら。」と解釈されていて，しかも校本ではない全集も校本の全集のどちらも「入」の漢字をあてていないのに，教育出版の教科書を例にするならば，昭和52年度検定の『新版中学国語１』から平成３年度検定の『新版中学国語１』までずっと「おや，川へ入っちゃいけないったら。」と「入」の字をあてていたのである[36]。この結語の「川へはいつちやいけないつたら。」は「川へは行っちゃいけないったら。」という意味と「川へ入っちゃいけないったら。」という二つの意味にとれるので，「入」という字をあてることに問題があると牛山恵は指摘している[37]。「行く」と「入る」のどちらにも読み取れる言葉の二重性がここにも看取される。だが，牛山が指摘しているように，原作では■や平仮名の表記である箇所を「きみ（君）」や「入」の字を恣意的にあてたりするのは問題があるといえるだろう。勝手に結語の一行を削除するのも同様である。教育出版の平成８年度検定版の『中学国語Ⅰ』には「おや，川へはいっちゃいけないったら。」と平仮名に改めているので，教科書編修にあたる者も問題性があると判断したことが推測される。

「オツベルの象」の結語の一行はこれまでの語りを突如打ち切っている体裁になっている。「牛飼ひ」が語っていたのに途中で打ち切った理由として，山元隆

春の「聞き手の誰かが危ない川に近寄ろうとするのを見た〈牛飼ひ〉のやさしい忠告としてこのことばをとらえることが，もっとも妥当なとらえ方であろう」[38]（傍点・筆者）という指摘がある。「行く」という意味で捉える場合，山元の指摘は肯ける。そして，山元の「上手に話を盛り上げて終わることをしなかった〈牛飼ひ〉の話の閉じ方は，〈実際の読者〉たちに対して，彼自身が語り出すことになった理由や，ひいては彼に語らせた作者賢治の意図を探っていくように問いかけるのである」[39]という指摘は「オツベルと象」の中の言葉の二重性という観点において看過できない。というのは，「川へは行」くのではなく，教科書にあったような「川へ入っちゃいけないったら。」と捉えた場合，聞き手の誰かは既に川の中に入っているという，さらに切迫した状況が想定されるためである。結語の一行は「川に行っちゃだめだよ」というやさしい忠告と捉えられる。だが，その一方で，「早く川の中から出てきなさい」と叱責するような危険な場面も想定される。よって，「行く」と「入る」では言葉のニュアンスに差異が生じるのである。また，聞き手は誰かという点でも解釈が異なる一行である。聞き手については遠藤祐[40]の牛だとする立場と小林俊子[41]や竹腰幸夫[42]の子供たちだとする立場にわかれている。「なぜぎよつとした？　よくきくねえ」や「おれも云はうとしていたんだが」の「牛飼ひ」の語りの中の合いの手から聞き手は人間であるといえる。「牛飼ひ」の語りには新式の稲扱機器をフル回転させる「のんのんのん」の擬音語や，憤慨した象の集団が襲来する時の「グラアガア」という擬声語等を多く用いた表現であることを考慮すると，聞いているのは子供であると思われる。そして，今まで語っていたのに，突如打ち切ってしまったのは緊急した状況であったと推測されるので，「川へ入っちゃいけない」の意味合いが強い。このように言葉の二重性という立場から解釈を提示したけれども，「川へはいつちや」が「行っちゃ」なのか「入っちゃ」なのか，学習者（読者）によって言葉のニュアンスの受け取り方が異なるので，断定できないところにこの作品の面白さがある。この結語の一行は検討したように「行く」と「入る」の違い，川に入る（または行く）のは誰かについて詳細に考えていくと解釈が異なってくる。古神子民夫はこの特徴を生かして「生徒それぞれに，想像豊かに推理させるべき」[43]だと言及している。そこで授業者が結語の一行をどのように指導するのか考えあぐねている現状の中，結語の一行を学習者に理解させ，想像力を豊かに育てる方法のひとつとして挿絵を活用した解釈法を提案したい。「オツベルと象」には数冊の絵本があるが，本稿では次の３冊の挿絵を使っていきたい。

資料①[44]の挿絵の解釈は制止しているのが「牛飼い」ではなく一人の子供である。この解釈は先行研究には見当たらない独自のものである。資料①の挿絵は結語の一行を一頭の牛が川に入ったと解釈している。川のかなり深いところまで牛が入っている構図である。牛を制止している子供の姿が描出されており，自分の命の危険を冒してまで牛を制止している子供の様子が描出されている。特にこの子供と牛の様子を牛飼いらしき人物が離れた場所から眺めている構図は特徴的である。「川へはいっちゃいけないったら。」の発話の主体が「牛飼い」で，「牛飼い」の言葉を聞いた子どもが急いで川の中に入った構図なのか，それとも子ども自身が言葉を発してから，川の中に入って牛を制止している構図なのか二通りの解釈が可能である。

資料②[45]の挿絵も一頭の牛が川の中に入っているという解釈によって描出されている。資料②の挿絵の

資料①　絵・遠山繁年

資料②
絵・佐藤国男

資料③　絵・木村昭平

中央には沙羅樹と思われる樹があり，沙羅樹を境にして象の世界と人間の世界が描出されている。人間の世界には二人の人間がおり，その内の小さく描かれている方の人間が牛飼いであろうと推測される。そして，川の中には一頭の牛が入っている構図になっている。この解釈も独自の解釈である。資料①や②から窺えるように，結語の一行をめぐって絵本の挿絵には独創的な解釈が描出されている。資料①・②は聞き手の存在は描出されておらず，一頭の牛が川の中に入っているという構図である。

資料③[46]は「川へは行っちゃいけないったら。」と解釈している挿絵である。よって，まだ何者も川の中には入っていない。この資料③は「牛飼い」らしい人物と牛たちの後ろ姿があり，「牛飼い」の話を熱心に聞く子供たちが描出されている点に特徴がある。この絵本には「おや，君，川へはいっちゃいけないったら。」と「君」の字があてられているので，牛ではなく，二人の子供が川に向かって行こうとしている構図になったと考えられる。

先行研究のほとんどが「行く」と解釈しているのに対して，教育出版の教科書では「川へ入っちゃいけないったら。」と「入る」の字が表記されていた。そして，絵本の挿絵も「川へ入っちゃいけないったら。」と解釈しているため，牛が川の中に入っている構図が多かった。「川へ行ったらいけないったら」と解釈して，しかも結語の一行の行為の対象が子供であるのは資料③だけである。絵本の①と②はどちらも川の中に入っているのは一頭の牛であるが，学習者によっては数頭の牛だと答える場合もあるだろう。絵本の挿絵にはなかったが，川の中に入っているのが子供，もしくは数人の子供たちだと答える学習者もいると思われる。「入る」という立場から見た場合，パロル舎の『オツベルと象』（宮沢賢治／画・小林敏也）[47]の挿絵は本稿が解釈した構図に一番近いものであった。パロル社の絵本の挿絵は，川の中に入っている一頭の牛が描かれている。川の中には牛だけではなく，ワニや魚や亀も泳いでいるので，川の深いところに牛がいる構図が描出されている。結語の一行をめぐる解釈に数点の挿絵を活用することによって，視覚的作用を媒介にして，学習者の想像力が喚起されていく。挿絵を活用すると，文学作品には多様な解釈のあることを学習者が理解するよう働き掛けられる効果を期待できる。

4．おわりに

ジョナサン・カラーは言葉にはひとつの側面だけでは収まらない性質があり，言葉の群れの組み合わせによって多様な意味が定着されていくことに言及している[48]。だからこそ，先行研究において白象のさびしい笑い，結語の一行や聞き手は誰かについて幾つもの解釈が生み出されている。本稿は言葉の二重性という観点から考察し，指導が難しいとされている結語の一行をそれぞれ異なった解釈によって描出された挿絵を活用した指導を提示した。挿絵を活用し，文学作品の読みをより豊かにしていこうとする授業報告はあまり見られない。だが，小山恵美子は「読者が幼いということを考えた場合，また，読者の経験や想像力の幅を考えた場合，絵がことばでは表現できないその場の情景を描いたり，読者の認識を補ったりすることによって，読者に知的な感動を与えることもある。絵本における絵」が，子供たちの「言語感覚を助け，ことばの持つイメージを絵によって膨らませる」[49]と指摘している。小学校教師であった小山の指摘は小学生を対象にしたものであるが，中学一年生にも該当する指摘であろう。挿絵を活用して想像力を育てる指導や，言葉には二重性があることの発見が解釈の多様性について考える切っ掛けになる。このような言葉の二重性が宮澤賢治の特有の現象であることを指摘したのが西郷竹彦である。西郷によれば宮澤賢治は「二相ゆらぎ」の方法で作品を構想したのであった[50]。西郷のいう「二相」とは「同じ一つの（世界・人間・もの・こと）の相反する，あるいは相異なる二つの相（現象）」[51]を指している。したがって，「オツベルと象」は相異なる「二相」の間で揺らめいている「二相ゆらぎ」という手法で描きだした宮澤賢治の作品のひとつであるといえる[52]。賢治の「二相ゆらぎ」という手法は，これまで考察してきたようにオツベルの価値観・白象のさびしい笑い・「牛飼ひ」の語りの内実・結語の一行をめぐる読みに振幅性を与えるものであった。これらの振幅性は学習者の読みを二重どころか多様にする可能性を秘めている。読みの多様性が学習者の批評力を育てることに繋がっていくのである。以上の点から『オツベルと象』は教材的価値の高い作品であることが明らかになったといえる。

【注】

1）『月曜』誌掲載時には「オツベルと象」であったが，宮澤賢治の作品を一般に普及させた文圃堂版全集第三巻（昭和９年）で「オッペルと象」と誤植された。以来，「オッペルと象」とされてきたが，筑摩書房版『校本宮澤賢治全集』第十一巻（昭和49年）で「オツベルと象」に改められた。

2）牛山恵「「オツベルと象」（宮沢賢治）教材史研究」

（『研究紀要』第45号，平成４年12月，教育調査研究所，p.10）
３）注２に同じ　牛山によると，教育出版の昭和37年版『標準中学国語Ⅰ』では「オッペルと象」ではなく，「よだかの星」を収載していたが，昭和47年版の『新標準中学国語Ⅰ』（教育出版）から再び「オツベルと象」を採用していることが指摘されている。（p.11）
４）古神子民夫「「オツベルと象」で何を教えるか　推理的読解による読み深めー白象のさびしい笑いに視点をー」（『教育科学国語教育』，昭和59年７月，明治図書）
５）松田司郎「白象（読者）はほんとうに救われたのだろうか」（『日本児童文学』，昭和51年，児童文学者協会）
６）笠井稔雄「読みを創造する楽しさ（「オツベル象」）ー“デクノボー”の悲しみを中心にしてー」（『月刊国語教育』，平成元年10月，東京法令出版）
７）山下宏「『オッペルと象』のプロット私見」（『国語教育と作品研究』，昭和53年12月，笠間書院）
８）竹腰幸夫「宮澤賢治『オツベルと象』の空間」（『静岡近代文学』，平成22年，静岡近代文学研究会）
９）平澤信一「民話形態としての「オツベルと象」」（『賢治研究』第43巻，昭和62年５月，宮沢賢治研究会，p.33）
10）山元隆春「「オツベルと象」における対話構造の検討ー対話をひらく文学教育のための基礎論ー」（『日本文学』，平成元年７月，日本文学協会，p.52）
11）門倉昭治「『オッペルと象』の読み方」（『日本文学』，昭和29年12月，未来社，p.36）
12）池上雄三「オツベルと象ー白象のさびしさー」（『国文学』，昭和57年２月，學燈社，p.87）
13）西田良子「「オッペルと象」の再検討ー賢治童話の系譜における異質性ー」（『日本児童文学』，昭和49年５月，日本児童文学者協会，p.26）
14）宇佐美眞「「オツベルと象」ー疎外された労働への諷刺ー」（『解釈』，平成15年２月，解釈学会，p.12）
15）注14に同じ（p.12）
16）注８に同じ（p.48）
17）須貝千里「〈「ことば」は伝わらない〉問題を超えられるかー『オツベルと象』の謎ー」（『文学の力×教材の力　中学校編１年』，平成13年６月，教育出版，p.32）
18）牛山恵「宮沢賢治『オツベルと象』研究」（『教材研究論集（中学校国語科研究シリーズ４）』，昭和58年，教育出版，p.19）
19）注18に同じ（p.20）
20）注18に同じ（p.22）
21）池上雄三「オツベルと象ー白象のさびしさー」（『国文学』，昭和57年２月，學燈社，p.88）
22）池川敬司「オツベルと象ー強迫観念に支配された哀れな男ー」（『国文学 解釈と鑑賞』，平成18年９月，至文堂，p.174）
23）注18に同じ（p.14）
24）遠野拓「「オツベルと象」論」（『日本児童文学』，昭和51年２月，日本児童文学者協会，p.111）
25）遠藤祐「〈十一月〉の物語ー「オツベルと象」は誰に語られたかー」（『学苑』，平成15年10月，昭和女子大学，p.19）
26）注４に同じ（p.88）
27）注９に同じ（p.38）
28）注９に同じ（p.37）
29）注17に同じ（p.35）
30）注21に同じ（p.88）
31）井上寿彦「「オツベルと象」小論ーオツベルは死んだかー」（「東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集」，平成10年４月，p.300）
32）注８に同じ（p.47）
33）注２に同じ（p.14）
34）注２に同じ（p.14）
35）天沢退二郎・杉浦静「賢治の森奥深くー『新校本宮澤賢治全集』編集委員に聞くー」（『宮澤賢治』第13号，平成７年，p.173）
36）今回の調査では昭和40年代の教育出版の教科書を入手することが出来なかったことをお断りしておく。
37）注２に同じ（p.15）
38）注10に同じ（p.57）
39）注10に同じ（p.57）
40）注25に同じ（p.23）
41）小林俊子「オツベルと象ー発表された物語ー」（国文学 解釈と鑑賞』，至文堂，平成18年９月）
42）注８に同じ
43）注４に同じ（p.88）
44）作・宮澤賢治／絵・遠山繁年『オツベルと象』（偕成社，平成16年１月）
45）文・宮澤賢治／画・佐藤国男『オツベルと象』（子どもの未来社，平成22年２月）
46）文・宮澤賢治／絵・木村昭平『オッペルと象』（福武書店，平成３年11月）
47）作・宮沢賢治／画・小林敏也『オッベルと象』（パロル舎，昭和62年年３月）
48）ジョナサン・カラー／折島正司訳『文学と文学理論』（平成23年９月，岩波書店，p.155，p.176）

49）小山恵美子「学習材としての絵本－「絵を読む」ことから生まれることば体験」（『月刊国語教育研究』，平成元年６月，日本国語教育学会，p.18）
50）西郷竹彦『宮沢賢治「二相ゆらぎ」の世界』（平成21年８月，黎明書房，p.83）
51）注50に同じ（p.31）
52）西郷竹彦は「二相ゆらぎ」の観点から「オツベルと象」を分析していないことを付言しておく。

＊本稿の「オツベルと象」の本文引用は『校本 宮澤賢治全集』（第11巻，昭和49年，筑摩書房）に拠っている。

＊引用した挿絵について，掲載を快くお認めいただいた偕成社，子どもの未来社，木村昭平氏に記して感謝申し上げる。そして尽力してくださった刈谷市美術館の方々にこの場を借りてお礼申し上げる。

（主任指導教員　山元隆春）